

宗教心理学研究会ニューズレター

第5号 2006.2.10

宗教心理学研究会

Society for the study of psychology of religion

Web版(PDF版)のため、紙媒体のものとページ数が異なることを予めご了承ください

目次

第3回研究発表会報告	報告	中野美加	1
第3回宗教心理学研究会研究発表会に参加して		岡村宏美	10
第3回研究発表会に参加して		松田茶茶	11
第3回研究発表会に参加して		齋藤耕二	12
公開研究発表会報告「宗教心理学的研究の現在」	報告	松田茶茶	13
公開研究発表会に参加して		杉山幸子	18
わが国宗教心理学の明日のために		加藤 司	19
西脇良氏と杉山幸子氏に対する宗教学者としてのレスポンス」をして		渡辺 学	20
公開研究発表会を終えて		安藤泰至	22
公開研究会に参加しての感想		石井賀洋子	24
事務局からのお知らせ			25

第3回研究発表会報告

報告 中野美加(神戸女学院大学大学院)

2005年9月12日(月)午前10:00~12:00(於:慶応義塾大学三田キャンパス南校舎)、日本心理学会第69回大会にて、宗教心理学研究会第3回研究発表会「宗教心理学研究の展開(3)-宗教心理研究の現在-」が行われ、最終日であったが、20余名の方が参集された。最初に司会の西脇先生(南山大学)よりワークショップ開催宣言と、様々な関心から宗教心理研究がなされてきた現状が報告された。そして、宗教心理の研究はその大半が宗教意識の研究であるといえ、今回のワークショップでは今までの研究を省み、今後の方向性を検討

する場としたい旨が説明された。

以下、当日の発表順に話題提供の概略を報告する。

1. 話題提供

(1)宗教意識研究の現状と課題~宗教意識から見る宗教の意義と尺度の問題:ジュマリ・アラム先生(山口大学)

(アラム先生は、従来の、特に日本における宗教研究が抱える問題点を、宗教構造の視点からインドネシアと日本の例を挙げて指摘された。)

総合的に見て、今までの宗教心理学研究で

探求しているのは(1)「宗教の所属性」もしくは「特定宗教の信者としての自覚」(2)「宗教的信念」もしくは「宗教観」(3)「宗教的行動」もしくは「宗教的実践」(4)「宗教的スタンス」もしくは「宗教的態度」の4つである。どの宗教心理学研究にも、これら(1)から(4)の暗黙の「序列の力」があるのではないか。例えば調査対象者の宗教性に、宗教意識に関する決定的な指標である(1)が欠けて、(2)(3)が存在する場合はやや曖昧・物足りない宗教意識を物語っており、(1)(2)(3)が欠けて(4)が存在する場合はきわめて低い宗教意識を表すのではないか。この(1)~(4)の扱いは曖昧であるが、宗教構造の観点から見ると問題点が明らかになる。

インドネシアは、国家规定の宗教がイスラム教、キリスト教、仏教、ヒンドゥー教で、他の宗教は認められていないが民間信仰も存在する、という宗教構造である。ジャワで宗教意識調査を行うと、(1)は決定的、(2)には依存、という大きな宗教構造があり、その通りに行動しスタンスももつので(3)も(4)も当然決まってくる。つまりどう聞いても決まった宗教構造のもとに答えるので、質問と答が合わないバイアスがある。

一方、メディアや様々な研究で紹介されるバリの宗教は、民間信仰である。宗教的儀礼から農業からすべてを支える組織があり、ヒンドゥー教の教典からは完全に離れている。しかしインドネシア国民としての宗教はヒンドゥー教なので、学校の宗教教育では民衆の知らないベダ教典を教えるというギャップがある。この中で宗教意識調査が行われると、(1)は公式な面だけが表れ、(2)(3)を調べると、多種多様で全部拾いきれない事になる。

日本での宗教意識調査の問題点は、過去の宗教あるいは国家的な宗教を否定する一方、宗教といわれないうままである程度宗教性を表現している点である。(3)は骨抜きされた宗教儀礼で、国民的レベルである程度認められている成人式や仏式の葬式など、生活の中の聖俗のひとつのサイクルになっているが、否

定性が民間信仰にも及んでいるのが特徴である。自然宗教は生きているが、根本的な部分、聖に関する部分は否定される向きがある。宗教意識調査でいつもこの否定的な面が前面に介入するのは、上記のような構造が背後にあるからである。

従来型の研究により得られる宗教意識の実態は、多くの場合、社会的に成立している宗教概念と宗教構造(宗教風土を含む)の下位に位置する意識に関するカテゴリーであるため、宗教意識を単独の事象として研究・調査するのは難しい。宗教意識研究は、研究対象全体をおおよそ取り巻いている宗教構造の課題を先行した上で、はじめて一定の実態と比較の基準・軸が浮き彫りになるのではないか。宗教の諸側面からみて、これからの宗教意識研究の課題は宗教的感情である。アンケートなどでは頭で考えたものしかでてこないのが実態的な面は捉えにくい、感情はアンケートで聞いたレベルとは別である。また、宗教が社会に現れるときには、二つの表れ方がある(認知宗教学)。一つは教義的な言葉で表記伝達できるもの、もう一つはイメージ的で分散して現れるものである。制度的な宗教は教義的なもので測れるが、民間信仰や自然宗教は、宗教の表現がイメージ的で、記憶にもエピソード記憶としてしか残らないので、意識調査では計りにくい面がある。

(2)女性の自然観に関する心理学的研究~自然の中の大きいなるなにかとの出会いを通して~
:岡村宏美先生(関西医科大学附属病院)

(岡村先生は、自然の中でsomething greatに出会う体験と、日本人の宗教性について探索的に研究された。)

一般に無宗教の人が多いといわれる日本人だが、「生物すべてに神を見る」という本居宣長の言葉があるように、既成宗教とは離れて意識しない形で神を感じるような、何か日本人独特のものがあるのではないかというのが、研究のきっかけである。本研究の目的は、日本人女性が自然の中で大きいなるなにかと出会った時の体験について調べ、そのような体験が一般的な心性なのか、小さい時自然の中で

遊んだ事があるなどの個別的な生活体験によるものなのかを調べることである。また「出会い体験」というのは一人一人違うものなので、その質的側面も調べた。

予備調査では38名中36名が「出会い体験」があると答えた。体験ありの人が実際に感じたことを自由記述で収集したところ、気象、太陽や空などを通して大いなる何かと出会ったという体験をもつ人が非常に多かった。ほとんどが肯定的な意見だったが、数人死を感じる、怖れを感じるという人もいた。

本調査では、関西、関東、九州在住の成人前期女性109名、成人後期女性44名を対象に、自然の中の「出会い体験」の有無が、年齢、現在や過去の住居環境、宗教教育の有無、自分や家族の信仰する宗教があるかどうかという個別的な生活経験と関連するのかを調べた。「出会い体験」の質的側面は、そのイメージ描画や自由記述から検討した。イメージ画は予備調査で収集した記述を組み合わせて作った例文4つから、自分でもそういう体験があるかどうか目を閉じてイメージしてもらい、「出会い体験」時の大いなる何かのイメージ画と、その時の気持ちのイメージ画を描いてもらった。また描画をもとに、それはどういう状況であったか、どういう気持ちであったか、その体験を通して自分が何を感じたかを書いてもらった。オカゲとタタリ概念を見るため宗教態度尺度（金児, 1997）、宗教への肯定的関心、神仏の関与などを知るために宗教意識尺度（西脇, 2003）を使った。自然神秘尺度の「自然に対する神秘的なものを感じているか」という因子も入れた。

「出会い体験」が「ある」が133名、「ない」が20名で、信仰の有無や宗教教育の有無、成人前期後期の年齢差のいずれにも有意差がみられず、どれも関連がなかった。宗教態度尺度は、経験ありの方が、加護観念が高いという結果が出た。宗教意識尺度では、体験のない人よりもある人の方が「自然・神秘」を感じていた。自由記述の分析では、体験の状況は予備調査と同じく気象が最も多く、海や湖にそういうものを感じる人が多かった。体験

時の気持ちは、プラスの内的状態について書いている人や、自然と自分が溶け込んだ感じになる「融合」を書いた人、自分がとてもちっぽけな存在として感じたという人、美しさや怖れを感じた人がいた。その体験は自分にとってプラスの変化があったように感じたという人や、人生で1回だけの事だったと思う人、何かわからず恐かったという人もいた。

今回わかったことは、大いなる何かとの「出会い体験」は、個人の生活環境に左右されない一般的な心性であるということだった。ただこれが一般的であるかは、日本人男性や外国人との比較が必要である。自由記述では肯定的な内容を書いた人がかなり多く、タタリに関する側面を書いた人がおらず、それについてもう少し深めていきたい。また今回自由記述やイメージ画を使い、質的な側面を検討した。その詳しい結果は今回発表できなかったが、大いなるなにかと出会ったときのイメージ画では、核のようなものをぐるぐると描く人が多かった。それが何を意味しているかを検討するのは難しかった。

(3)「死への不安に及ぼす宗教関連意識の効果」：松田茶茶（神戸学院大学大学院）

（松田先生は、死の不安コーピングに貢献できる可能性を、ひとつのモデルを通して提案された。）

死の研究で一番多くみられるのが、各個人が持っている死に対する態度を捉えようとするものである。これは非常に多面的、包括的で、不安、恐怖、抑うつ、受容などが考えられる。死に対する不安の大きな特徴は、性格特性、心理的不適応、リスク行動と強い関係をもつ事と一般的に言われている。そのため、死に対する不安の研究で得られる結果は、デス・エデュケーションに大きく寄与できるのではないかと考える。

死の不安とはどういうものが、1996年に Tomer (1996) が作成したモデルを見ていきたい (Figure 参照)。出発点が「死の顕在性」で、個人がどんな形であれ死について何かを考えると顕在性が高まる。死の顕在化の次は、「世界に対する信念」「コーピングプロセス」

「自己に対する信念」の3プロセスに移る。コーピングプロセスをうまく働かせる事ができる人はここである程度、死の顕在性に対するコーピングが行われる。それを媒介に、世界や自己に対する信念へ移り、世界をどのようにとらえ、自己をどの程度のものとして位置づけるかにより、「死の有意味性」「過去に関する悲観」「将来に関する悲観」にいく。「死の有意味性」は、死が自分に、あるいは人類にとってどれほどの意味を持つか、どういう真の意味を持つか、を考えるプロセスである。これが低い、死を無意味だと考える人は死の不安が高くなりやすいという。過去および将来に対する悲観は、自分の過去の理想的自己、現在の実際の自己、将来の理想としている自己を統合しているもので、そこに悲観が生まれ、それが高くなればなるほど死の不安が高くなると言われている。

この中で宗教的な特性の強い変数は、「世界に対する信念」「死の有意味性」であろう。「世界に対する信念」は、自分自身に、あるいは人類にとって世界はどういう機能を持つのか、どういう意味を持つのか、死とは何なのか、について多くを宗教から教えられるところだと思ふ。死の不安の構造は、文化的、宗教的な特性を強くもつものと考えられる(Florian, 1983)。実際、宗教属性の異なる集団を対象に、死の不安に関する研究調査を行うと、そこから得られる結果には大きな差異がみられる。

宗教と死の不安の関係性について、以下はその先行研究の紹介である。

Florian (1983): (ユダヤ系キリスト教男子学生と士官学校男子学生対象) 宗教信仰レベルが高いと、死の不安の中の「自己消滅」因子の不安が有意に低い。

Young (1992): (プロテスタント、カトリック、ユダヤ系キリスト教、無神論対象) 宗教信仰レベルが高いと、死は自分にとって懲罰であると考え傾向が有意に低くなる。「死は懲罰だ」と考える傾向は、先述したモデルの「死の有意味性」が低いという事になる。

Leon (1997): (韓国陸軍兵士対象) 非キリスト教徒に比べ、キリスト教徒の方が有意に死

の不安が低い。キリスト教徒内で比較すると、礼拝参加率、聖書を読む頻度、お祈りの頻度の高いキリスト教徒は、それが低いキリスト教徒よりも有意に死の不安が低い。

Roshdieh (1997): (イスラム教徒大学生対象) 宗教にまつわる信念・行動傾向の高い者は死の不安、死にまつわる抑うつが有意に低い。
Swanson (1998): (大学生対象) 内発的宗教信仰の高い者は死の不安が有意に低く、自分にとって死は懲罰であると考えた上で、その懲罰に対する恐怖傾向が有意に低い。

Clements (1998): (高齢者対象) 内発的宗教信仰の高い人は「未知なる死」という死の概念の因子が有意に低い。

Thorson (2000): (地域住民対象) 幅広い年齢で調査すると、どの年齢でも宗教信仰の動機が内発的な者は、死の不安が有意に低い。

James (2002) (ローマカトリック教徒と無神論者対象) 死にまつわる迷信(言い伝え)、幼少から親や周りの大人から聞くような死についての言い伝えへの信心の高い者は健康不安が有意に低い(死の不安と健康不安は非常に相関の高い)。この関係性は交互作用がみられ、ローマカトリック教徒の方がその傾向が高い。

これらの先行資料をまとめると、自己の属する宗教への信仰が内発的で、宗教行動の頻度が高い場合に死の不安が低減される、といえる。試みに、先述のモデルに「精神的健康」と「身体的健康」の2変数を新たに加え、死の不安が高まると精神的健康は悪化する。精神的健康が低減すると、これと相補性の高い身体的健康も悪化することがある。「死の顕在性」に戻ると、死についてさらによく考えるようになる、という循環モデルが出来上がる。このモデルを作ったTomerによると、このコーピングプロセスは「自分の人生を概観する事」「人生設計」「自己の文化の同一化」「自己超越プロセス」の4つからなるという。「自己の分化の同一化」「自己超越プロセス」はコーピングプロセスの中でも、さらに宗教性の高いものである。「自己の文化の同一化」は、自分の属している文化や価値の基準を達成できて

いるかどうかを考え、その達成との同一化により自尊心を高めていくというプロセスである。「自己超越プロセス」は、自分という存在は世界の1要因で、その世界は宇宙の中の1要因であると考えを膨らませ、自分が死ぬ事で宇宙と1つになるという考え方により、自己の消滅を受容していくというプロセスである。このコーピングプロセスがうまく働くと、「世界に対する信念」「自己に対する信念」に段階が移ったとき、ポジティブ思考になる。すると次にくる悲観が低減され、「死の有意義性」が高くなるので死の不安が低くなり、今回付け加えた健康が高まる。

以上から、宗教は人間の健康側面において直接、あるいは間接的にどれだけ貢献しているのか、そのマグニチュードを明確化できるような気がする。そうするとデス・エデュケーションや健康教育、ストレス・マネジメント等の方略として組み込む際に、今あげたモデルはひとつの指針になるのではないかと考える。

(4)「鎮めと煽りの宗教性とspiritual well-being」河野由美先生（藍野大学）

（河野先生は、日本人の宗教性とspiritual well-beingの関係について発表された。）

spiritualityは多様な要素からなる多義的な概念であり、spiritualやspiritualityの日本語訳には、いまだ定まった見解がないが、大きくは、自己の内面に関心が向かう側面と超越的側面の二つである。超越的次元、「人知を越えた存在」「神聖さ」「長敬の念」に関しては、宗教性と非常に重なる。ただこの重なりがどの程度なのかには、意見の相違がある。またspiritualと宗教性の違い、spiritualとmentalの違い、spiritual well-beingとmental well-beingがどう違うのか、という事に関していろいろな考え方があるが、WHOのspiritualに関する見解は、「『霊的』は『宗教的』と同じ意味ではなく生きていく人間すべてにとって必要なもの」である。日本のspiritual well-being研究の多くはガン末期や余命の短い人に対する研究である。窪寺先生によると、spiritualityは人生の危機に直

面した時に覚醒し、その危機の中で生きられる力や希望を見出そうとして、自分の存在にとり「最も確実なもの」「最も重要なもの」を見つけ出し、獲得する事で危機を生きようとする機能である。他には健康者にもspiritualityは重要な問題であるという立場などいろいろある。

次にspiritual well-beingは、「神、自己、コミュニティ、環境との関係性の中での人生の肯定であり、それらは全体性を育み、心から享受されるものである」と全米宗教間相互協力委員会が定義している。要するに、

「spiritual well-beingというのは身体的・心理的・社会的な健康と同等ではなく、むしろ、たとえどんな否定的な状況にもかかわらず、イエスとすることができる、そういう人生の肯定なのである（鶴若）」そのほか、今村先生や河先生は、spiritual painやspiritual distressの対極にあるのがspiritual well-beingであり、その内容は希望を見出したたり、人生の意義・目的を見出したたり、平安・信頼や、つながっているという感覚で、肯定的な感情をもつことであるとしている。そしてmentalとspiritualの違いは、いろんな意見があるが、私は「何故」という意味に答えるものがspiritualではないかと思っている。

日本での高齢者を対象にしたspiritual研究調査は非常に少ない（高橋・井出,2004）。しかし、spiritualは健康の定義で言えるように、健康な人にも重要であり、人生の危機に直面している、あるいは自分の人生を振り返らざる終えない老年期の人や、大切な他者を亡くした遺族にとってもspiritual研究は非常に重要になってくる。今回の発表では主に高齢者のspiritual研究の結果と、遺族のspiritualの結果について報告したい。

今回は金児先生の調査結果を使って発表する。金児先生が開発された宗教観尺度は制度宗教、成立宗教だけではなく日本人の心の深層にある民俗宗教性「オカゲとタタリ」を測定できるように開発されている。この宗教観尺度を用いた場合、「向宗教性」「加護観念」

「靈魂觀念」の3因子が抽出される。高齢者がサンプルの場合は、これに「近代合理主義というもう一つの因子が抽出される。精緻な研究の結果から「オカゲ」因子は人の欲望を鎮める働きがあり、「タタリ」因子はそれを煽る機能があるといわれている（金見,2005）。この鎮めと煽りについて、宗教学者の大村先生は、古来日本の宗教は「鎮めの文化」であったが、近年は煽る方ばかりが出てきているという。

大阪市立大学の21世紀COEプログラムのプロジェクト研究の結果である20歳から85歳までの関西圏住民4千名の無作為抽出した大規模調査の結果から発表したい。6件法で行い、有効回収人数は1199名、所属宗教は、信仰している宗教はない、その他、新宗教、キリスト教、仏教、神道の6種だった。「向宗教性」は制度宗教に対する好意的・接近的態度なので信仰している宗教がない人は当然、中位点よりも低い。それに対して、いわゆる成立宗教に関わっている人たちは中位点を大きく越える。次に加護観念は自然にも敬虔な気持ちをもつオカゲ意識を表すが、信仰している宗教はない人が加護観念の場合は中位点を越えて3.7になる。キリスト教は人数が少なく曖昧な結果だが、中位点を切る。それ以外は中位点を大きく越える。信仰している宗教はないとしながらも、加護観念は有している。次に靈魂觀念、タタリ意識だが、信仰している宗教はない人が中位点を下回る。しかし非常に年齢差があり、全体的に見ると中位点を下回るが、若い年齢層では大きく中位点を越える。その他の宗教では、神道が4.2で一番靈魂觀念が強い。キリスト教徒は3.1と中位点を下回る。向宗教性、加護観念、靈魂觀念を年齢別と、さらに都市部と村落部に分けてみた。都市部と村落部では宗教的態度が違うことが知られている。すると年齢が高くなればなるほど、向宗教性が高くなることを見て取れる。加護観念も同じく、一直線に高くなる。宗教性は年齢により非常に大きな違いがある。幅広い年齢層を対象にせず、大学生だけの調査では日本人の宗教観を論じるのは危険であると思わ

れる。面白いのは、加護観念も向宗教性もちょうど50歳でプラスになり得点があがる。靈魂觀念は年齢が高くなるにつれ下がるのだが、同じく50歳で今度はマイナスに転じる。こういった年齢的なことが非常にあることを付け加えたい。

宗教性とspiritual well-beingとの関係だが、主観的幸福感をLawtonのPGCモラル・スケールを使って4件法の一括方式に変えたものを使い、PGCの尺度得点を目的変数としたステップワイズ法の重回帰分析を行った。説明変数には、宗教観尺度、性別、年齢を投入している。その結果、先行研究と同じ心理的動揺、不満足感、老いの拒否、の三つの次元が出た。加護観念が高い人ほど、高齢者では人生の満足感があり、老いを拒否しないことが明らかになった。また近代合理主義が高い人ほど、老いを拒否することが分かった。次に大切な他者を亡くした遺族に行った調査だが、死別後どのような心の変化が生じたかということで作った尺度である。生きる意欲の消失、周囲への感謝、自己の成長、不調、実存的関心の5因子が出たが、宗教性との相関関係を見ると、オカゲ意識が強い者ほど死別後の「生きる意欲の消失」が少なく、「周囲への感謝」の気持ちが強くなっていた。

高齢者の老いの受容や主観的幸福感、遺族の死別後の心理的变化では、オカゲ意識（加護観念）が強く影響しており、現在の状況を肯定的に受け容れるspiritual well-beingの「人生の肯定観」に強く関係していた。そして欲望を鎮める働きがあることが実証された。これらから、ターミナルケアで遺族のグリーフ・ケア、高齢者へのケアを考える上で、宗教性（特にオカゲ意識）に焦点を当てたspirituality研究が必要であると思われる。

2. 指定討論

齋藤耕二先生（東京学芸大学名誉教授）：三つの視点から

言語的な反応とは何かという問題に誰もが直面するが、宗教意識もその問題をはらむ。宗教心理学は非常に宗教的な自覚を強調する

事にウエイトを置く宗教であるキリスト教を背景にしたもので、そこで育ったモデル、パラダイムをわが国でそのまま受け容れていいの、という問題がある。江戸時代に起きた檀家制度が、自分の宗教的信仰について聞かれたときに、答えられない、無宗教であるという日本人の宗教風土を作ったかもしれない。ほとんどの人が仏教徒と答えても仏教徒であるという自覚を持たない。そういう日本の宗教的風土を考えると、日本で宗教意識を研究するのは非常に大きな制約を持つのではないか。西脇さんの宗教的自然観や岡村さんの大いなるものとの出会いのように、回りくどい仕方でやらなければならない。この宗教的自覚のウエイトを、どう考えたらいいの。

宗教研究者の間ではcivil religionという概念が注目を浴びている。日本のcivil religionというのがやはりあり、我々はそれに従っているのではないか。civil religionのひとつの大きな特徴は、それを宗教として自覚しないところにあるので、日本の宗教的風土に非常にぴったりしている。戦争が終わってから60年も経っているのに日本の総理大臣が靖国神社に固執する、また総理大臣になるとクリスチャンである大平さんまでが伊勢神宮へ行った。もしかすると特定の神道のカミに出会うためではなく、日本のcivil religionのカミに報告に行くのではないか。こういう宗教として自覚されない宗教を、宗教意識として研究することができるのか。このcivil religionという形もmodern societyだけの問題ではなくて、人類に普遍的なものだといわれるが、政教分離が行われるほど、implicitな形でcivil religionが機能するようになるのではないか。その意味で、宗教意識研究にはcivil religionみたいなものをどうやって研究していくのかという問題がある。

宗教心理学では、宗教的な発達(宗教意識の発達)がひとつのトピックになる。しかし発達のプロセスをきちっと取り上げたものはほとんどないのではないか。たとえば、Argyleの本ではreligious socializationと非常に簡

単に片付けている。社会化には違いないが、宗教意識、宗教的な自覚がどのように形成されてくるのか、どういう要因によって決まるのか、特に社会的な変数との関係とをみていく必要があるのではないか。発達心理学的な視点から宗教意識というものを考えることが必要ではないか。

3. 発表者からのリプライ

(1) アラム先生から

自覚については、斎藤先生と一致している。ベースになるのはあらゆる自覚的な宗教だが、宗教表現という読み方を私はしているので、何処の地域でもはっきりとした教義的な宗教とイメージ的な宗教の二重性があると思っています。たまたまキリスト教、イスラム教が多く社会では教義的な宗教の位置にあり、教義で自覚できる、言葉で語れるので従来の意識調査研究のやり方に向いている。しかしそうではないものがこの社会にもある。民間信仰的なものには、分散して必ずしも言葉ではなく継承されているものがある。これは従来型の調査では、向いていないと言おうとした。また日本だけがこういう特徴を持つというんな研究者が言うが、私は否定したい。言葉にならない宗教性というのはすべての社会にある。意識調査では、そこをどうやって汲み取るかというのが、ひとつの課題であるが、私は少し絶望的だと思っている。最低でも宗教構造を質的な研究でよく理解、整理したうえで、量的な研究で、部分的なものを測れるのではないかと考えている。

civil religionは、民間信仰の方が位置づけとしては近いというイメージを持っているが、概念の適用については迷っている。斎藤先生が日本はcivil religionの好例であると、その意味では私は民間宗教的な、教義ではない人々に共有されているものという風に見てもいいのではないかと思う。

(2) 岡村先生から

一般的にイメージする宗教は、キリスト教のように自覚を促すものだと思うが、私は、先生がおっしゃっているイメージ的なところを見たいなと思って試みたが、結局よく分か

らないまま終わった感じである。言葉にならない宗教性を、何かの形で見たいと思っている。今回は、日本女性の一般的な心性にそういうものがあるのではないかと試みた。海外の子どもの宗教性について書いてある本を読むと、やはりカトリックやイスラム教やいろんな宗教でも、何か奥の方には普遍的なものが流れているとあった。そういう共通性に興味はあるが難しいと思った。

(3)松田先生から

宗教を宗教として自覚するかしないかは興味を持っているところである。私自身の研究で宗教に関する調査を行おうとすると、意識的な部分を引っ張り出すことしかできなかった。自覚すると意識することは、同義ではないが近いと思っている。今日紹介した先行研究は、自覚をしているから出てきたものである。日本の研究は蓄積が少ないのが現状で、できないから少ないのか、してないから少ないのか、それは私には今のところわからない。

civil religionについては、イメージ的要素が濃いほう、これは自覚、意識をしな部分なので調査がしにくい、データが得にくい、だから分析がしにくい、蓄積が少なくなる、という流れになると思う。ずっと行動を観察していない限り、とるのは難しいなあと思う。ただそこにこそ、分析していて醍醐味があると思っている。

発達の観点から言うと、死のイメージ概念の発達で、子どもの頃にはどんな概念だったかというのは、だいぶ蓄積がある。死をどの時点でネガティブなものとするようになるのか、という事に興味があり、それはどこかに宗教が関連しているのではないかと、どれだけ関連しているかというのを調べたいなと思っている。

(4)河野先生から

生涯発達を考えると、向宗教性、加護観念、靈魂観念がちょうど50歳のところでプラスマイナスに分かれている。この現象は他の研究でもみられ、金児先生は「50歳分岐説」を唱えている。何故50歳で変化が起るかということ、一番大きく関与するのは二人称の死、身近な

他者の死の経験である。それが宗教観に変化を起し、死生観、最終的に死の不安に影響している。そして40歳、50歳は老いを自覚する頃で、自分の有限性を自覚する。これらが宗教に対する接近的態度をもたらし、死生観の変化を生じさせるのではないかなと思う。

自覚についてだが、日本では宗教は何ですかと聞かれて仏教と答えても宗派も分からない。いつ自覚するかというとお葬式のときで、自分は何々宗だったのかという自覚が芽生えてくる。また心理学で言われているように、態度が行動を予測するだけでなく行動を変えれば態度が変わると言われるが、どういう行動をしているかで意識は変わってくると思う。実際に、向宗教性、加護観念、靈魂観念と宗教行動を調べると、3つの宗教行動がみつかると。それは慰霊行動、自己修養的行動、現世利益的行動で、自己修養的行動は向宗教性と強い相関、慰霊的行動は加護観念と強い相関、現世利益的行動は靈魂観念と強い相関があった。やはり意識だけではなく行動との関連を見ていくのが今後の宗教意識調査においては重要だと思う。問題なのは、あなたは日ごろどのくらいの宗教行動をとっていますか、と聞くのでまさにアンケートである。だから実際の行動を見て、観察した結果を今後はみていかなければならないが、アンケート調査の限界も考えている。

civil religionは、宗教の定義と関連してくると思う。岸本英夫先生の宗教というのは人間に究極的な生活の意義を与え、問題の解決を与えるという基本的定義を非常に大事だと思っているが、いろんなものを含めてしまう事になる。そうするとspiritualとの違いが問題として出てくるので、この問題に関しては自分の中で今後整理していけたらと思っている。

4. フロアを交えての質疑応答

認知心理学の立場から菊池先生(いわき明星大学)のご意見: 生理心理学、神経心理学の話は大学ですと、必ず脳死brain-deathの話をする形になる。死の定義として、脳の死は人の死だと、日本でも制度化されているが、civil

religionのレベルでいうと、素朴な感じとして何かついていけないと、国民の一部にはそういう気持ちがある。この脳の働きとmentalityの関係の話をする時その例として話す。脳が死んだら、本当に人は死んだ事になるのか。体が灰になっても、自分という自己という心は存続すると思うかという素朴な質問を学生にすると、正確な数字ではないが、約半数に近い学生が「存続する」と答える。こういう問題は意識の問題である。存続するかしないかを経験科学的には答を出せない。この質問に対して、どう考えるかというのが、今日お話になった心の健康、ともつながる。

河野先生：今の脳死の問題だが、大阪市立大学で金児先生を中心として、脳死臓器移植への態度と、宗教観を調査した。靈魂觀念の高い人ほど臓器移植については反対するという結果が出ている。ただそれは大阪市立大学の学生だけであるため、その結果は一般化できない。そういう宗教性といろんな態度との関係を見ていくのは有意義な事だと思っている。

菊池先生：臓器移植に反対というのは、介在変数に当たるのは脳が全部死んでしまった、それは人の死だ、そういう風には考えられないという知識。そういう知識があるのかわからないかということである。

河野先生：知識の程度、脳死とはどういう状態かという質問も入れた。そうすると、靈魂觀念が高くして臓器移植に反対するのは、ほとんどの人に「知識がない」というケースであった。知識と関心の二つの側面も見ただが、知識も関心もなく「ただ反対」という結果であった。加護觀念の人は「知識があって、反対する人」と「知識があって賛成する人」の二つに分

かれた。加護觀念は関心も非常に高かった。知識も比較的高かったという結果が出ている。分析について藤島先生(甲南女子大学)のご提案：斎藤先生のコメントを含めて思ったのだが、宗教意識研究を心理学の尺度研究では多くされているから、そろそろジョイント因子分析をして、何が共通の因子が明らかにし、そういう研究をきちんとした上で論議しないと、常にいろんなコメントが出てきてまとめられない、答えられない。また重回帰分析のような先見的な分析ばかりやっていると、常に入力変数を入れて、共分散分析をやるべきだと思う。

河野先生のデータ分析で気になっていたのだが、標準偏回帰係数や決定係数がそれほど高くないところで、数字を言ってもどうかと思う。中位点の問題で、中位点の前か後かという話では、二乗検定で話をつけるべきではないかという話も含めて(サンプル数が多ければ平均値も下がるので、4.1と4.7で差があるといっても始まらないので)、もう少し厳密な分析が必要ではないか。発達研究のエリクソンの尺度でも50代で変わるが、印象とデータとは違うと思う。エリクソンのモデルを含めてその辺りまで宗教心理学が答えられるかというレベルまでは来ていると思うが、今日の感じではまだなのかなとも感じる。データの中でどう話をするか、答えられないことは非常に残念である。

特殊性と普遍性の話をするときに、データをどう扱うのかという問題がある。これから研究するならば、明確なデザインを行っていく必要があるのではないかと聞いてみた。

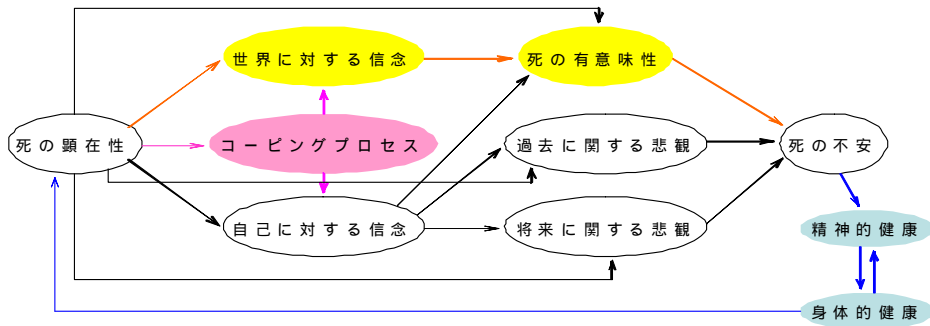


Figure “死の不安形成モデル” (Tomer & Eliason, 1996)を基礎にした健康循環モデル

話題提供者から[1]

第3回宗教心理学研究会研究発表会に参加して

岡村宏美 (関西医科大学附属病院)

今回は話題提供者を務めさせて頂きありがとうございます。発表会に参加させて頂き、様々な事を考えました。ジュマリ・アラム先生のご発表からは(この感想は研究会全般を通して感じた事でもありましたが)宗教意識と一口にいてもどこに重きを置くかによって視点が変わっていき、多様である事がいい部分でもあると思いますが、まとまりにくさも同時に存在する事になり、一貫性を保った結果を出す事が非常に難しいという事、また対象となる民族の土台として何があるのか、という視点を入れる事が、宗教意識研究において対象となる民族の「土台」が宗教意識に与える影響の大きさを考慮する事が重要である事に改めて気づかされました。

松田先生のご発表は宗教意識と死に対するコーピングスキルの関係という非常に興味深いものでした。外国の文献を多くレビューしていただきましたが、日本での調査研究は「土台」の違いから日本に特徴的な結果が得られ

るように思いました。河野先生のご発表では私の意識としては「オカゲ」と「タタリ」は表裏一体のイメージがあったため、「オカゲ意識」「タタリ意識」についての結果が興味深く感じました。

私は修士論文「女性の自然観に関する心理学的研究」を発表させていただきましたが、自分の中で整理がついておらず、まとまりがなく、分かりがたい発表になってしまい大変申し訳ございません。先生方のご意見をお伺いしたかったのですが、研究の内容もうまく伝えられなかったように思いますので、詳細は省きますが、どのような内容の研究であったか簡単にここで述べさせていただきます。これまでずっと疑問であった事として「現代日本人はいわゆる既存の宗教に対する信仰心や宗教心に関心を持っている人が多くないという事実=無宗教」なのだろうか??という事があり、本研究では既存の宗教心とは別の形で日本人の宗教性を捉えてみようとして「自然の中に自ら

を超越した何かの存在や、力を感じる体験(大いなるなにかとの出会い、と本研究では命名する)」について質問紙、イメージ画を用いて調査、検討しました。対象者は成人前期女性 109名(平均年齢26.7歳)成人後期女性 44名(平均年齢47.9歳)計 153名、目的としては具体的に以下の3点としました。(1)日本人女性が自然の中で大いなる何かと出会う体験の有無の実証的検討、(2)自然の中で大いなるなにかとの出会い体験の有無が一般的な心性であるか個別的な生活経験によってあるかの確認(年齢、既成宗教への関心、信仰の有無、過去、現実の自然環境との関わりの多少との関連から)(3)大いなるなにかとの出会いの質的側面の検討です。結果、考察としては(1)自然の中で自分を越えた大いなるなにかを感じた経験有が133名、無しが20名となり、多くの人が自然の中で大いなるなにかとの出会い体験をしている事がわかりました。(2)大いなるなにかとの出会い体験の有無と年齢、既成宗教への関心、信仰の有無、過去、現実の自然環境との関わりの多少それぞれを検討した結果、どの項目に置いても関連がみられず、自然の中で自分を越えた大いなるなにかとの出会い体験は日本人女性に一般的な心性である事が示唆されました。しかしこの心性が日本人女性独特のものであるかどうかは同じ手続きでの調査を日本人男性、また外国人にして比較しなければ断定できない為、今後更なる調査が必要であると考えています。(3)自由記述、イメージ画の分析からは、「大いなる

なにかと出会う状況」では「太陽」をはじめとする天空の様々な現象が多い事がわかりました。また、大いなるなにかとの出会いを通して受ける感情としては出会ったその時の気持ち、それを思い起こしての気持ちいずれにおいてもプラスの感覚を持つ人が多い事がわかりました。その内容を見ると、前者は「包まれ守られる」「あたたかい」といった「受けとる」気持ちが割合として高く、後者では「こころにプラスの変化が見られた」「自分への気づき」など受け取ったものを自分の中で肯定的なものに変化させる記述が多く見られました。記述内容としては肯定的な内容(オカゲ)が多い中、一方でわずかではありますが自然の怖しさや自然への畏敬の念(タタリ)をあらわした内容もみられています(全体の約5~15%)。この気持ちは出会ったその時の気持ちの記述(5.4%)よりもそれを思い起こしての気持ちの記述(14.5%)で多く見られ、体験をしたその場よりも出会いの後で畏敬の念があらわれると推測されます。また、全体において否定的な内容が少なかった理由としては、本調査における例文に否定的な内容を伴ったものがなかった事が一因として考えられます。また表面上にはオカゲの念を示す事でタタリの念を鎮めようとする日本人の心性が働いている(会田,1975)とも考えられます。今後の研究では本研究とは異なった方法でオカゲの側面だけでなく、タタリの側面を含めての自然(寺田,1984)の中で大いなるなにかとの出会いを検討する必要があると考えています。

話題提供者から[2]

第3回研究発表会に参加して

松田茶茶(神戸学院大学大学院)

今回の発表にて初めて、ワークショップを聞く側から話す側へとなりました。ワークショップに関して何をするのも初めての経験であるため、発表へ向けての準備の一つ一つに困惑がついて回りましたが、まず何よりも大変に思ったのは、タイトルを決めることでし

た。ワークショップ全体として"宗教意識研究の現在"というテーマが掲げられていることから、自身の発表タイトルを決める際、"'宗教意識'とは何か"ということから考え始めましたが、そうすると"意識"という用語そのものについての議論から始めねばならないため、

非常に厄介なテーマとなってきました。

そこでここはひとつ"意識"という語を自分なりに解釈しようと、"個人がもっている、抑圧されていない考え"と、平たく捉えることとし、そこでの"考え"という語は、信念、概念形成、感情、認知、行動など、様々なこころの作用を包括して表わすものとして用いることにしました。そして"宗教に関連する意識にまつわる研究の現在"というようにテーマを捉えなおし、自身の発表タイトルに"宗教関連意識"という語を差し込むこととしました。

最終的に、自身の普段の研究興味が"死の不安"にあることから、発表タイトルを"死への不安に及ぼす宗教関連意識の効果"と決定しました。宗教にまつわる信念や感情といった心理的変数が死への不安に影響を及ぼすということは、ある程度コンセンサスの得られた知見ではあります。しかしここで、そのように周知となっている知見を取って発表にもち出してくるからには、何か新しい提起がなければ意義のないことと思ひ、色々模索した結果、"健康"という、心理学において非常に大きな変数が浮かび上がりました。

心理学の最終目的には様々なものがあり、それは各研究領域あるいは方法論によって異なりますが、健康がその1つであることには、おそらく異を唱える方は少ないでしょう。また、死の不安が健康と密接な関連をもつことは、概念(理論)的にも実証的にも明白なことです。そう考え、宗教関連意識、死の不安、健康の三者を1つにモデリングすることを試みました。もちろんその際には、実証研究にて明確化されているものを土台とせねばならず、幸いなことに宗教と死の不安の2つに関しては、既にレビュー論文により構築されたモデル

("死の不安"形成モデル)が存在するため、それを基盤に健康変数を当てはめていきました。

その結果、宗教関連意識、死の不安、健康の循環モデルができ、その全体モデルの中で、健康に対して宗教関連意識がいかに関与を及ぼすか、その際に、死の不安をはじめとし、どのような変数がいかに介在するのか、ということが示されました。また、宗教関連意識が死の不安に及ぼす影響に関する実証知見を提示することで、ある程度の妥当性をもったモデルであることも何となくではありますが示すことができました。

しかし、この循環モデルには統計的な妥当性検証がなされていないという大きな問題が残っており、何よりこの問題を消化しなければ、今回このワークショップで発表したことが無駄に終わってしまいます。また、検証の方法論を検討することも非常に重要かつ困難で、しかし意義ある作業です。そのため、今後はこの発表内容を発展させることに従事することを決意しました。

発表した内容が、ワークショップにお越し下さった方々にどのように映ったかは分からず、最初から最後まで不安と緊張とにかられており、何が何だか、自分で何を話しているかも分からないうちに終わってしまいました。今後の自身の研究の方向性を決めることのできた今回のワークショップは、私にとって非常に有り難い契機となりました。

最後に、先生方と発表場をご一緒させて頂けたこと、私の生ぬるい発表をお聞き下さった皆様がいらっしゃったこと、全てに心より感謝申し上げます。

指定討論者から

第3回研究発表会に参加して

齋藤耕二(東京学芸大学名誉教授)

宗教の社会的影響力の低下が進んで、日常生活の中では宗教と何ら関係を持たずに生

きてゆくことができる今日の下においても宗教あるいは信仰に関心を持つ人の数は

少なくないように思われる。宗教組織の政治的影響力や宗教と結びついた対立、葛藤は国際的規模でも、国内での問題としても注目を浴びている。

しかし心理学研究者の間での関心ということになると少なくとも我が国の現状では極めて低いのではないと思われる。近年心理学とその関連領域に対する社会的要請の高まりに心算して心理学科、臨床心理学科、子ども（発達心理学）科などを設ける大学が著しく増加しているが、これらの学科において宗教心理学が講じられているということを知ったことがない。当然、私が知らないだけということもあるかもしれないが、公平に見て宗教心理学をマイナーな領域と見ても間違いではないだろう。

このような様子であるので、心理学会の大会最終日のさらに午前というよくない条件では、出席者は研究会の仲間内に限られるのではないかと予想していた。定刻前に会場に到着してみると人影がなく、企画、司会、話題提供などの関係者のみの集まりとなるのかと思われた。しかし始まってみるとかなりの参加者で、宗教に興味を示す人の数が少なくないことに驚かされた。

これらの人々が、研究会の主題となった「宗教意識」研究に惹かれて参加したのかと考えると一寸心許ない感じがする。

時間の制限もあって一般の参加者の発言が多くなかったように記憶しているがもしかすると関心的にずれがあったのではないと思われる。企画の趣旨に述べられていたように「宗教意識」がこれまでの宗教心理学の中

で主要な分野であったとしても、今の社会に生きる我々が宗教に目を向ける契機となっているわけではない。

「宗教離れ」とか「世俗化」と呼ばれる傾向が強まる中であっても今でも宗教を求める人や信仰に生き甲斐を見いだす人々が存在している。これらの人々がどのような動機から宗教に向かうのか、そこではどのような働き、効用を宗教は果たしているのかといった問題に宗教心理学は解答を示しているのだろうか。

概して、心理学での研究はすでにある理論の枠組みに従って、そこから引き出された仮説の検証に向かいがちな傾向が強く、現実の具体的な問題を研究対象とすることを避ける傾きを持っている。理論の修正、発展は究極的には科学の進歩をもたらすので、このような傾向を全面的に否定するわけではないが、しかし宗教心理学の発展が社会への貢献に結びつくためには社会の現状から遊離することは望ましくないだろう。

実際にどのような解決法があるのかと問われ時に具体的な提案を私ができるわけではない。課題を共通に自覚することが前進の第一歩となることだろう。ただ宗教のように学際的アプローチを必要とする現象の理解を目指す場合に集まりを心理学に限られた大会の中で開くことが適切なのか振り返ってみる必要があるのではないだろうか。

研究会に参加しての感想という事務局からの依頼から大分逸れてしまったが、研究会のメンバーの間での意見交換のきっかけとなればと願っています。

公開研究発表会報告「宗教心理学的研究の現在」

日時 2005年10月16日(日)13:00～17:30

場所 南山大学名古屋キャンパスDB1教室

報告 松田茶茶(神戸学院大学大学院)

1. 開会の挨拶

安藤先生より、開会の挨拶、ならびに指定

討論者に関する訂正とお詫びがなされた。

2. 宗教心理学研究会の紹介

研究会事務局より、宗教心理学研究会の紹介、ならびに入会にかかる手続きの案内が行われた。

3. 研究発表会の趣旨説明

安藤先生より、本発表会の趣旨について、「国内外における宗教心理学の扱われ方の相違」、「日本における宗教心理学の保たれるべき位置」等の問題を取り上げ、説明がなされた。また、本発表会発表者および指定討論者の紹介(氏名、所属、専門分野、著書等)がなされた。

4. 研究発表

4-1. 西脇良先生 「子どもを取り巻く宗教的環境 エコロジカル・モデルの視点から」

自身の著書「日本人の宗教的自然観 意識調査による実証的研究」に掲載されている、過去の研究調査(博士論文)に基づく発表を行う。長期的研究課題として「宗教性発達モデルの構築」を掲げ、その大目的のための方向性明示として、「子どもはいかなる宗教的環境と相互に作用し合い、自らの宗教性をいかに発達させるのか」という問題設定をしている。この視点から、現在と取り組んでいる「宗教的自然観」という課題を再考するため、著書の概要を紹介しながら今後の展望を提示する。

日本における宗教意識に関する調査では、日本人の宗教関心の低さが浮き彫りになる傾向が強いが、果たしてそれらの調査の問い方は十分であったのか、という疑問から本研究は出発している。そのため、人間の宗教的営みを捉えるには、人間としての存在の在り方そのものの自覚によって生じてくるような宗教性を視野に入れた、より根本的な指標が必要であると考え、その根本的な宗教性の指標として「宗教的自然観」を設定した。その前提には、宗教は「有限である人間が無限を想起し、その関係性のもとで人間の問題の究極的解決を目指そうとする営み」である、という定義があり、これは自然と人間との関係認識に焦点を当てた指標となっている。

まず、カトリック系学校9校に通う中高生3466名を対象に、過去の身近な自然体験に関する自由記述式質問紙と、宗教意識尺度を実施

した。その結果、記述された自然体験の時期は1~3年以内のものが多く、場所は山、海、自宅等様々で、体験同伴者としては家族が最も多く、体験内容は空や天体に関するものが多かった。更にこれらの記述内容から、一般的自然観や宗教的自然観を抽出するため、分類作業を行った。その結果、最終的に124コードが作成され、その中で宗教的自然観に該当するものは18コードであった。この宗教的自然観に該当する記述回答の中で最も多かったものは「自然に接して自分という人間の存在の小ささ、無力さを感じた」というタイプで、全体の4.6%を占めていた。また、この宗教的自然観と宗教意識との関連を検討したところ、宗教的自然観は、神仏靈魂概念に代表されるような従来型の宗教性指標とは次元を異にすることが分かった。

次に、上記の記述回答で最も多かった「小ささ・無力さ」について追加分析を行うため、「小ささ・無力さ」について記述した群と記述しなかった群とを比較した。その比較結果をまとめ、モデル化を試みたところ、「"小ささ・無力さ"の認識モデル」が導出された。このモデルは、「ストレスや悩みが蓄積されている状況のもとで、作為のない自然との接触が起こると、自己存在の"小ささ・無力さ"の認識がなされ、その結果、ストレスや悩みの軽減がもたらされる」というものである。この認識モデルの妥当性の検証、ならびに認識形成プロセスの説明は、今後の課題として残されている。

最後に、宗教的自然観の問題を、今後いかなる枠組みにおいて展開させるかについて考察するとき、大目的である「宗教性発達モデル」を構築するにあたり、Bronfenbrenner(1979)の提唱したエコロジカル・モデルの適用可能性が示唆される。そしてその中では具体的に、自然界は、宗教性発達モデルとして想定されたあるエコロジカル・システムの下部に存在して、個人と自然から成るマイクロシステムでの相互作用をはじめ、メゾシステム、エクソシステム、マクロシステムという、Bronfenbrennerの提唱する

いずれのシステムにおいても相互作用が見られるであろう、という仮説が立てられる。そのため、今後はこの仮説に従ったモデル構築のための調査を行っていく予定である。

4-2. 杉山幸子先生 「真光における調査三態質的・量的方法の併用」

自身の著書「新宗教とアイデンティティ 回心と癒しの宗教社会心理学」に掲載されている、過去の研究調査(博士論文)に基づく発表を行う。この研究調査を行うにあたっては、Kroll-Smith(1980)と宮永(1980)の研究論文に大きく影響を受けており、宗教行動(パフォーマンス)の中に宗教的社会化プロセスを読み取ろうと試み、調査の方法論としては、参与観察、面接、質問紙という3種の調査法を用い、宗教における個人の社会化プロセスを探索・検証した。

まず、崇教真光の初級研修会を受講し、道場に通って、調査者自身も手かざしを受けながらその場を観察する、という参与観察を行った。この調査からは、組み手(手かざし)の社会化プロセスにおける重要な課題として、(1)感覚とその表現方法を磨く、(2)解釈図式を学び対話の中で自在に使えるようになる、(3)手かざしスキルを向上させる、という3点を見出すことができ、また、それらの学習を支える"親密な"場の特性として、身体距離の近さと身体接触、場の開放性、組み手間の平等性、解釈図式の共有による受容と共感が抽出された。

次に、崇教真光の中で組み手を行う青年を対象にインタビュー(面接)を行い、彼らのライフヒストリーの中に組み手としての社会化プロセスを跡づけることを試みた。この調査からは、「信じていなかったが通った」、「活動しているうちに楽しくなった」、「信じていなかったが奇跡を体験してから通うようになった」等、宗教的社会化が複数の側面を有し、一様ではないことが分かった。

更に面接の結果に基づいて、質問紙調査を行い、組み手の宗教性の構造と社会化プロセスについての統計的検討を試みた。このとき作成した質問項目は、同じく崇教真光を対象

に調査を行った谷(1987)のものと同類似性が高く、入信動機や家族内の組み手の構成等に関して共通した結果が得られた。この調査からは、宗教性の次元として(1)信念、(2)行動、(3)体験、(4)共同性の4因子が抽出された。また、この4因子に影響を与える要因として性、年齢、入信年数の3つを仮定し、検証的分析を行った。その結果、a)"体験"因子において有意な性差(男性<女性)が認められる、b)"信念"因子において青年後期は得点が低く、懐疑の傾向が見られる、c)"行動"因子は男女ともに成人中期(35歳以上)において顕著に高い、d)"信念"、"行動"、"体験"の3因子において入信年数の効果が認められる、といったことが分かった。

以上、ライフサイクルの段階と、崇教真光という特定集団内部における社会化の双方に注目した調査を行ったが、これらより得られた知見は一般化することはできない。なぜなら、本調査は特定のフィールドの特性を描き出すために設計されたためである。しかし、この3種の方法論を用いたことには大きな意義があり、流れを追って質的、量的の両方の手続きによる分析、解釈をすることが、それぞれの調査目的を忠実に全うすることになるという利点をもっていると考えられる。

5. 指定討論

5-1. [心理学より] 加藤司先生

まず、1つの学問分野としての宗教心理学という概念について、こころに関連する事象を宗教学的観点から捉える宗教学なのか、宗教ならびに宗教活動を心理学的観点から捉える心理学なのか、それとも全く別ものの領域なのか、その学問的位置づけを考える必要がある。

次に、宗教活動を科学的心理学から見る場合、以下の3つの問題が浮上する。1つ目は客観的視点の保持である。客観性を保つためには、実証的なデータを重視した研究が必要となり、また、宗教関係者以外の研究者による発表や、宗教にとってはネガティブと思われるようなデータの論文中での提示等も不可欠となる。2つ目は心理学フィールドにおける認知である。これは1つ目の客観的視点ともつな

がる問題であり、科学性重視の傾向の強い現代の心理学において宗教心理学が広く認知されるか否かは、学問的位置づけにも関わる岐路となる。3つ目は研究結果の妥当性である。調査により得られる結果には大きく、意識レベル、行動レベル、生理レベルの水準があるが、いずれの場合にも、用いる指標の妥当性、そして分析や解釈の方法論の妥当性等、結果提示に至るまでのどの段階においても妥当性の問題はついてまわるものであり、科学的心理学においては常に要求されるものとなる。

続いて、西脇先生の発表に対しては、「宗教的自然観」という語彙そのものの定義に疑問が残った。辞書的定義、操作的定義の明確化、ならびに宗教的自然観を宗教性の指標として用いることの妥当性のより詳細な明示が望まれる。また、今回発表された研究調査は探索的なものに留まっており、ここから更に仮説検証型の調査も行うことが必要であろうと思われる。

杉山先生の発表に対しては、ここらに関連するテーマを宗教学的に捉えている感じを受けたが、心理学フィールドでの研究であるとするならば、科学的心理学の見地から違和感を感じず。具体的には、研究の方法論、仮説生成、方法や結果の記述のし方等、いずれにおいてもより実証性の高い手続きを採用し提示することが望まれる。

5-2. [教育学より] ミカエル・カルマノ先生

まず、西脇先生の発表に対しては、スピリチュアリティを研究することが、宗教的自然観を宗教教育の中で取り扱うとき、調査対象の宗教属性(宗派や教義)によってはその教えに反することがあるのではないかと、という危惧が生じる。

杉山先生の発表に対しては、まず研究の危険な部分として、研究者自身が見つけようと思うものを見つける、という恣意性の問題を忠告するとともに、宗教心理学の研究としては、個人の体験に注目することが非常に重要となることを述べておきたい。また、今回の発表内容には宗教の教えが変数として入っていないことが気になった。

宗教心理学全体に対しては、宗教心理学にとって有益となる、他領域におけるテーマについていくつか紹介したい。例えば宗教と芸術との関係性については、「音楽は神の言葉の受け入れを妨げる雑音である」と解釈されたときもあれば、両者の交流を可能にする枠組みの作成が試みられたこともある。また、両者は互いに独立なものであるとした上で、両者を体験する必要性を説くものもある。このように、心理学とは普段領域を異にしていると思われる所にも、宗教心理学として非常に興味深いテーマは散在しており、それらを拾ってくることも面白いのではないかと思われる。

5-3. [宗教学より] 渡辺学先生

まず、日本人と宗教について概観しておく。現代日本人における宗教意識に関する3つのデータを挙げると、信仰率は20~30%と一見低く見られるが、宗教行動を示す人口は70~80%、宗教所属人口は約180%と、意外に高いことが分かる。つまり、特定の宗教を信じていると意識する人は少ないが、ほとんどの人に宗教や信仰への関心がある、という日本人と宗教との関係性が示される。しかし家の宗教が中心であり、絶対性が希薄であることもまた分かる。

次に、西脇先生と杉山先生の発表内容を、調査者自身の宗教的属性、研究領域、調査フィールド、前提理論等のカテゴリーに分け比較してみると、それぞれのカテゴリーで大きく異なっていることが分かる。この違いを踏まえて、両氏それぞれの発表への質疑へと移る。

西脇先生の発表に対しては、宗教性の指標として宗教的自然観を用いることにより、日本人の隠れた宗教性を浮き彫りにしようとしていることが分かる。しかし、宗教を"有限である人間が無限を想起し、その関係性のもとで人間の問題の究極的解決を目指すとする営み"と定義するならば、そこには、人間はどのように自己の有限なあり方を認識するのか、あるいは、どこに究極的解決の端緒を見出し、ていくのか、という問いが生まれる。それが

ら、宗教系の学校で収集したデータは一般化できるものなのか、更には宗教科目中に実施した調査となると、宗教的内容の回答を期待されていると思った学生もいるのではないかと。また、「小ささ・無力さ」に関する記述の解釈として「死や無による生命認識」と関連づけているが、それは果たして妥当であるのか、といった疑問が生じる。

杉山先生の発表に対しては、「共同体」因子において性、年齢、入信年数のいずれの効果も認められなかったということは、質的方法から導いた仮説が、量的方法によっては検証されなかったということの意味しているのか、明示が必要であったように思う。

両氏の研究を併せ見ると、「癒し」に関する共通性が見えてくる。両氏いずれの場合においても、「癒し」の問題をどこまで宗教的なものと解釈することができるのか、宗教心理学においては「癒し」をどのように扱うべきなのか、検討を積み重ねなければならない。今日の宗教学においては、スピリチュアリティと癒しの研究が盛んになっているが、そこから学ぶべきものはないだろうか、と提案できる。そう考えるとき、心理学的宗教心理学者と宗教学的宗教心理学者の共同研究が今後に望まれる。

6. フロアとの討論(質疑応答)

各指定討論者から受けた質問、提言、助言、講評等の1つ1つについて、西脇先生、杉山がそれぞれ返答したのち、フロアとの討論がなされた。

西脇先生に対して「公民科の観点から見た、宗教的情操論を扱うことの倫理的問題」に関する質問がなされ、加藤先生に対しては「宗教心理学(者)への指定討論中の批判は、どこの国のどのような研究を念頭に置いて言ったのか」という質問がなされた。この後者の質問に関しては、非常に活発な論議へと展開し、加藤先生が「科学的な心理学研究の立場から宗教の研究を進め、根付かせることを目的とするならば、という考えを念頭に置いており、

現段階では国内のことを念頭に置き述べている」と返答したほか、多くの意見交流がなされた。

また、加藤先生が指定討論中に述べた「ネガティブな結果の提示」の提言に対し、「ネガティブ」という言葉の解釈についても議論となり、そのことについて加藤先生は「ネガティブな結果の提示はインパクト・ファクターの高いジャーナルに多く、ポジティブな結果の提示はインパクト・ファクターの低いジャーナルに多く見られる、という事実があるため、宗教心理学を広く認知させるためにも、ポジティブな結果提示のみでは好ましくなく、発展が見込めない」と述べた。それに対し、杉山が「ポジティブとネガティブの弁別をつけるのは難しい」と、カルマノ先生が「ネガティブ側面があるか否かは、各宗教それぞれを実際に調べなければ分からず、一緒にしてもまとまらない」と、安藤先生が「宗教のどのような側面をネガティブ側面とするのか等、完全なる客観性がない」というように、それぞれの立場からの意見を述べた。その上で加藤先生が「宗教心理学を心理学フィールドで根付かせることを望むならば、ネガティブ側面の提示や、宗教心理学研究者における宗教者の比率などを考えねばならない」と答える等、非常に大きな論議となり、宗教心理学の発展にとって建設的な方向性論議が行われた。

7. 閉会の挨拶

安藤先生より、「実証的立場からの指摘や、宗教学側からの論理性の重要性の確認といった、様々な意見の交流が図られ、予想以上に白熱した議論となった。このことは、新たな学問領域として進もうとする宗教心理学にとって、非常に有り難いことである。今後もこうした発表場面を計画、実施することで、この領域の更なる進展が見られることを期待したい」との講評がされ、閉会の挨拶がなされた。

研究発表者から

公開研究発表会に参加して

杉山幸子 (八戸短期大学)

昨年の10月16日、当研究会の初めての公開研究発表会で西脇先生とともに発表をさせていただきました。小著をベースにするという企画には、以前の発表と重なる部分が出てくるため、「またか」と思われるのではないかという危惧がありましたが、さまざまな学問的立場の方が指定討論に参加して下さるということに面白さを感じ、叩き台として供することを決意しました。結果的には指定討論とその後のディスカッションが予想以上に盛り上がりましたので、恐る恐る発表した甲斐があったと思っています。

宗教心理学的研究は長い間心理学ではマイナーの立場にあり、私は参与観察とインタビューという手法から出発した（後に質問紙調査も行いましたが）という意味でも主流からは外れたところに位置していたと思います。一方で宗教学や宗教社会学には親和性を感じるわけですが、実際には「こだわりどころ」に微妙な（しかし明らかな）違いがあり、そちらでも落ち着きの悪さを感じざるを得ません。ただ、年月を経ているうちに、こうした研究会が発足したということもあり、心理学と宗教学とに関わりなく、何となく落ち着いてしまったところがありましたが、今回の討論ではその居直っていた部分を揺さぶっていただいたという思いがします。

発表は小著から真光における調査の部分を取り出し、参与観察、面接、質問紙調査という3つの方法での研究の流れを示しました。第2回のワークショップでも「方法」という問題を取り上げ、その際に金児先生からは同一者が質的・量的の方法を併用するよりも、心理学であれば専門性を生かした量的方法（質問紙や実験）による研究を行い、宗教学の質的方法による研究と補い合うほうが効率的なのではないかというご示唆をいただきました。そのようにチームで研究を行う可能性を念頭

におきつつ、私個人の小さな試みを紹介したわけです。

指定討論者は心理学の加藤司先生、教育学のカルマノ先生、宗教学の渡辺学先生のお三方でした。立場の違いを反映して、三者三様のそれぞれ有益なコメントを下されたことに感謝します。

私の発表に対して、加藤先生は「宗教学的」、渡辺先生は「宗教そのものに関心があるわけではない」という正反対の評価をされましたが、そこにまず宗教心理学的研究の難しさが表れていると思います。私自身としては、煎じ詰めれば宗教というより、宗教集団に所属し、活動している人々に関心があるわけなので、渡辺先生の評価は予期できるものでした。「宗教学的」という評価には意表を突かれましたが、私の研究方法に疑問をもたれたのと、対象者（信者）を内的に理解しようとする態度に危険性を感じられたのだと思います。それが「宗教集団に所属していることによるネガティブな側面についてのデータも論文にすべき」とのご指摘につながっていますが、この点については、そうしたデータを隠したり無視したりするつもりはなかったので、研究者としての当然の心構えだと思いましたが、改めて考えてみれば、隠そうとする政治的な意図がないとしても、無意識に否認してしまう可能性は常にあり、また、あえて意識しないとすくい取れない側面でもあり、重要な問題だと思います（カルマノ先生は「自分が見つけようと思うものを見つける」危険性を指摘されましたが、ネガティブにしる、ポジティブにしる、その通りでしょう。だからこそ研究の方法と研究発表の方法が重要になるわけですが）。加藤先生のコメントで会場の議論は大いに盛り上がりましたので、ぜひこの続きを研究会でやっていただきたいと思います。

カルマノ先生はまた、宗教心理学における体験の重要性、社会化研究の困難などを含蓄に富んだお言葉で語って下さり、渡辺先生は小著を博論の審査者のように（むしろそれ以上に）読み込んで、貴重なコメントを下さいました。今回の公開研究会は一般の出席者が少ないという点こそ残念でしたが、私にとっ

てはもちろん、研究会の多くの方にとって刺激的で実りの多い（あるいは実りを予期させる）ものだったと思います。

最後になりましたが、名司会者の安藤先生、研究発表会の開催にご尽力下さった西脇さん、松島さん、お手伝い下さった研究会の方々に感謝申し上げます。

指定討論者から[1]

わが国宗教心理学の明日のために

加藤 司(東洋大学)

ここでは、研究講演会で両先生が発表された内容や、両先生に対する私の指定討論の内容ではなく、「宗教心理学」について思うことを書かせていただきます。

2004年の日本心理学会にて、宗教心理学研究会主催のワークショップが開催されたことは記憶に新しいことかと思えます（残念ながら、私は参加できませんでしたが）。このワークショップを、星野命先生が「心理学ワールド」の巻頭言で取上げられていることをご存知でしょうか。そこで、星野先生は、ワークショップに感慨をおぼえたと述べられた後、次のように書かれております。「筆者の知る限り、過去の宗教学的心理学者としては、岸本英夫（1939, 1959）、とその門下の松本滋（1979, 1987）らのほかに、竹中信常（1957）、小池長之（1975）らがあり、心理学的宗教心理学者として、今田恵（1934, 1947, 1953）を別格とすれば、20世紀中には、金児暁嗣（1983, 1987, 1995）や、杉山幸子（2003）以外にはほとんどみることができない。」

星野先生が「別格」と称されました心理学的宗教心理学者の今田恵先生は、「宗教心理学」をどのように考えておられたのでしょうか。言うまでもありませんが、今田恵先生は、わが国の私学で最古の心理学実験室（関西学院大学心理学実験室）を開設され、わが国心理学界の歴史を築いた人物です。今田恵先生のご子息である実験心理学者今田寛先生（元関

西学院大学学長）は、今田恵先生の心理科学観について、次のように述べられております。

「今田にとっては心理学は、牧師になる道棄ててまで選んだ学問であるから、自分の一生をかけるに値する立派な科学でなければならなかった。そこで「科学とは」という問題に関心をもちつづけ、1940年頃、たまたま目に留まったのがハーバード大学を中心とした操作主義と、シカゴ大学を中心とした論理実証主義に淵源する科学統一運動であり、それを『理想』に紹介している（今田, 1941）。またこれが操作主義の主張者であるブリッジマンのThe logic of modern physics（1927）の翻訳出版（1941）につながるようになる。いうまでもなくこの二つの動きが新しい科学観を生み出し、それが心理科学をワシントンの素朴な科学観から脱却せしめ、より柔らかな行動主義とも言うべき新行動主義の誕生を促すこととなったのである」（今田, 2001, p. 438）。また、今田寛先生は、ご両親の指導原則のひとつとして「疑問があれば放っておく。必ず自分で調べる」という実証と実験の精神をあげておられます（今田, 2003, p. 189）。

心理学における科学観は、今田恵先生がご存命であられた頃から、大きく変化しておりますが、今田恵先生が守ってこられた心理科学観、その重要性が変わることはないでしょう。今田恵先生の心理学研究室を受け継いだ

今田寛先生。私は、その今田寛先生に学位をいただきました。科学的心理学による宗教心理学研究がなされることを願っております。

今田寛先生の最終講義で、忘れられないお言葉あります。今田寛先生は日本近代医学の父と称されているエルウィン・ベルツの日記の一節を取りあげられました。最後に、その引用で締めくくりたく思います。「……ベルツが明治34年に、日本の科学者たちを痛烈に批判しているのが日記に記されている。曰く、『われわれ西欧からのお雇い教師たちは、アリストテレス以来西欧に連綿と流れる科学精神を伝えるために来日したつもりである。科学精神という種を蒔いておけば、そこから科学の樹がひとりでに生えて大きくなり、それ

はいずれ新しい実を結ぶと信じたからである。ところが日本の科学者たちは科学精神には目もくれず、われわれから果実ばかりをつみ取るうとした』。つまり科学の成果をもたらした大本にある精神を学ぼうとしないことへの強い不満表明なのである」(今田,2003, p.146)。

引用文献

星野命 2005 日本の宗教心理学の今昔 心理学ワールド, 28, 1.

今田寛 2001 わが国心理学会への行動主義の受容 今田恵と関西学院大学心理学研究室 心理学評論, 44, 433-440.

今田寛 2003 目に見えないもの、言葉にならないもの 二瓶社

指定討論者から[2]

西脇良氏と杉山幸子氏に対する宗教学者としてのレスポンス」をして

渡辺 学(南山大学)

このたびは表記の発表会において宗教学者としてのレスポンスをさせていただいたことにまずは感謝したい。私は、「科学的」宗教心理学とは縁遠い「宗教学的」宗教心理学の研究者である。そのため、私なりにお二人の研究発表を内在的に理解することを試み、そこから問題点を見出す方法をとったことをあらかじめお断りしておきたい。

はじめに 日本人の宗教意識の現況から

まず、きわめて概論的なレベルから話を始めさせていただきたい。現代日本人の宗教意識には信仰率(20~30%)と宗教行動(70~80%)宗教所属人口(約180%)の3つの指標があることが指摘できる。自覚的宗教行動(祈り、読経、坐禅、瞑想、など)はわずかであり、初詣や墓参りなどの年中行事が主体である。また、日本人の場合、宗教団体への多重所属が一般化しているため、宗教所属人口が180%ほどになっていることが特筆に値する(文化庁の1988年末現在のデータでは、神

道91.6%、仏教76.3%、キリスト教1.2%、諸教9.3%となっている)。むろん、これは信仰の実態を必ずしも反映していない。

そして、日本人と宗教の関係に関しては、1)シンクレティズム(重層信仰)、2)特定の宗教を信じる人は少ないが、ほとんどの日本人には宗教や信仰への関心がある、3)家の宗教が中心で個人の救済を中心とした個人の宗教という意識が弱い、4)絶対性が希薄である、といった点が指摘されている(幸日出男他著『宗教の歴史』創元社、1990年、参照)。

このような枠組みから見ると、西脇氏の課題は、このように低い信仰率の陰に隠された宗教的な自然観を明らかにすることにあり、杉山氏は、むしろ宗教的なマイノリティの自発的信仰に焦点を当て、それを思春期の発達過程と重ね合わせて検討することにあった。

西脇氏と杉山氏のご発表の対比

次に、西脇氏と杉山氏のご発表に関してであるが、両氏の発表を対比してみると、以下

のようになるのではないかと思われた。

a. 基本前提

西脇良氏は、発達心理学者であり、宗教者であるとともに研究者である。基本的な動機づけには、宗教教育への強い志向性があり、学生自身に隠されたうちなる宗教性を気づかせたいという意図がある。そのため、西脇氏は、教団経営（カトリック）の学校の宗教科目で調査することに違和感がないし、その結果を普遍化できると考え、単に宗教学校の特徴を表すための調査とは考えていないように思われる。

杉山幸子氏は、社会心理学であり、無信仰の立場の研究者として「宗教は過去の遺物」と考えている。むしろ、宗教批判的な動機づけがあり、「信心深い友人に対する違和感と反発から新宗教を研究対象に選んだ」と著書には書かれている。回心（宗教的社会化）への関心があり、社会心理学的方法の適用対象として、たまたま新宗教教団を選んだのであって、宗教教団そのものに関心があるわけではない。

一方で、西脇氏の暗黙の前提は、内なる宗教心に気づくことはよいことであり、できれば、学生に信仰心に目覚めてほしいということであり、このような調査には、《宗教情操教育》の礎としての意義があると考えられている。今日、宗教教育の主流はむしろ《宗教情報教育》にあり、前者の《宗教情操教育》にはいまだに警戒感が強いのは確かではないかと考えられる。

それに対して、杉山氏の暗黙の前提は、社会心理学的方法はいかなる人間集団にも適用可能なはずであり、新宗教団体も例外ではないということである。杉山氏は、新宗教団体においてその適用可能性を試してみただけであり、新宗教団体にも一般の心理的メカニズムが見出されるにちがいないと考えている。

b. 調査方法と結論

西脇氏の調査方法は、自然観に潜む宗教性を探るための意識調査である。西脇氏は、宗教を「有限である人間が無限を想起し、その関係性のもとで人間の問題の究極的解決をめ

ざそうとする営み」と定義する。ここでの問題提起は、「人間はどのように自己の有限なあり方を認識するのか、あるいは、どこに究極的解決の端緒を見出していくのか？」ということである。そして、より根本的な宗教性の指標として「宗教的自然観」を設定する。日本人のいわば「隠れた宗教性」を浮き彫りにしようとする。

私は、西脇氏の調査方法と結論に対してそれぞれ1点ずつ疑問を抱いた。前者に関しては、調査が宗教系学校や大学の宗教科目の授業内に宗教科目担当者によってなされたことである。宗教的自然観は全体の4.6%みられたというが、私は、宗教科目ということで宗教的な内容を盛り込むことが期待されていると思った学生もいるのではないかという疑念を抱いた。おそらく、その疑問は、対照群としてまったく異なった相手に対してアンケートを採ることによって解消されるだろう。

後者の結論に関していえば、西脇氏は、最も多かった宗教的自然観の記述が「自然に接して自分の小ささや無力さを感じた」と指摘し、ヌミノーゼ体験における「被造者感情」を引き合いに出し、伊藤整の「死や無による生命認識」と関連づけている。はたしてそれはどれだけ妥当なのだろうか。西脇氏自身、「ストレスや悩みが蓄積されている状況のもとで、作為のない自然との接触が起こると、自己存在の"小ささ・無力さ"の認識がなされ」（レジユメ、p.3）、「すると、ストレス・悩みの軽減が結果としてもたらされる」（Ibid.）と述べている。これはむしろ、利害対立的で閉鎖的な人間関係の対人ストレスのはけ口やカタルシスを単に自然に求めているだけであると解することはできないだろうか。つまり、癒しの源泉として自然が現れているとも解されないであろうか。

次に、杉山氏の発表についてであるが、杉山氏の調査方法は、社会心理学における量的方法と質的方法の併用である。質的方法としては、宗教的社会化に関する面接調査を行い、青年期女性の4事例により、回心（宗教的社会化）の事例として検討している。そして、

著書においてアイデンティティの形成・共同体による癒し・霊に対する興味・呪術的癒しの4つのポイントを著書で指摘している(pp. 137-140)。また、量的方法としては、質問紙調査を行っている。杉山氏の仮説は、1)女性のほうが男性よりも宗教性が強い、2)年齢が高くなるほど宗教性が強くなる、3)入信年数が長くなるほど宗教性は強くなる、3つであった。

杉山氏は、「信念、行動、体験の三つの次元では何らかの要因の効果は認められたが、共同体の次元では年数、性、年齢のいずれも有意な効果は見られなかった」と述べ、共同体の次元が「青年期において特に高まる」という予想は当たらなかったことを明らかにしている(p.155)。このことは質的方法の仮説が量的方法によって検証されなかったということの意味するのではないだろうか。その点について疑問を抱いた。

II 両氏の研究からみえてきたもの

両氏の研究から見えてきたものは、いずれの場合にも「癒し」の問題が出てきているということである。西脇氏の場合、ストレスからの解放としての自然体験が問題であったが、杉山氏の場合、共同体による癒し、呪術的癒しの指摘がなされた。

西脇氏は、「自然による癒し」を宗教的自然観にひきつけて考えているが、はたしてそれはどこまで言えるのだろうか。伝統的な花鳥風月をめぐる習慣はどこまで宗教的と言えるのか。これは、家永三郎氏が『日本思想史における宗教的自然観の展開』において指摘し

た問題へと帰っていく。つまり、花をめ、月をめるのは宗教的か、それとも、美的感性の問題なのか。日本人は古来、対人関係の「うさ」を自然に向かうことによって癒してきたのではないか。われわれは、これを宗教的というべきなのか*。

また、杉山氏の場合も癒しの要因を十分に明確化できているだろうか。「共同体の次元が青年期に高まる」という形で青年の「共同体による癒し」を検証することができなかった。

それでは、宗教心理学では、「癒し」の問題をどのように扱えるのか、あるいは、どのように扱うべきなのだろうか。心理療法や精神分析の成果を取り入れるべきなのか、それとも、それらと独立した調査方法を策定すべきなのか。今日、宗教学の領域では、スピリチュアリティと癒しの研究が盛んになっているが、そこから何かを学ぶことができないだろうか。

「心理学的」宗教心理学と「宗教学的」宗教心理学の両者が何らかの接点を見出し、今後、両者の共同研究が進展していくことを期待してやまない。

* Manabu Watanabe, "Religious Symbolism in Saigyō's Verses," *History of Religions*. Vol.26. No.4. (Chicago: University of Chicago, 1987), pp.382-400.

拙論では、家永とラフルーアの所説を批判しつつ、西行の釈教歌に注目して宗教儀礼と月の象徴表現の関連性を明らかにした。

司会者から

公開研究発表会を終えて

安藤泰至(鳥取大学)

本研究発表会において、学問研究の場にふさわしい有意義でかつ後味の良い議論のバトルが行われたことはまことに喜ばしい(それを引き出して下さり、司会者のちょっとした

挑発(?)に乗って下さった発表者および指定討論者の方々に心からお礼を申し上げます)。当日、いささか司会者の役割を逸脱しつつ述べたコメントについてこの場で若干の補

足をすることで、私の感想に代えたい。

これまで宗教心理学において、宗教学的宗教心理学と心理学的宗教心理学の差異ということが言われ、科研費の共同研究においても宗教学サイドの研究者と心理学サイドの研究者の間には若干のズレや齟齬があったことは否めない。しかし、これは「宗教学」対「心理学」、あるいは宗教心理学をどちらのサイドに引きつけて考えるか、という二項対立的な問題なのだろうか。そもそも宗教学はゲリラの学問（柳川啓一）と言われるように固有の方法論を持たない後発の学問であり、人文科学の中では最も早く自然科学への擬態を始め、組織の上でも方法論の上でも最も制度化が進んだ心理学とは置かれている立場自体が全く非対称である。私がコメントで述べたのは、「宗教」そのものの自明性が疑われている現代の宗教状況の中で、あくまで「宗教」を研究対象として自らの知の外側に置きつつ、それを既成の研究方法でもって切り取るとする心理学は、現代における「宗教」に肉薄することができるのか、あるいは逆に「宗教」の問題に関わることによって「心理学」そのものが変わりうる可能性はないのか、ということであった。それが全くできない（宗教は単に一般心理学の知を検証するための研究対象にすぎない）とすれば、極端に言えば「宗教心理学」などというものは存在しないということになる。

もちろん宗教学の側とて一様ではなく、（私自身を含め）自らを宗教心理学者とは規定し得ないにもかかわらず「宗教心理学」と聞くとなぜか血が騒いでしまう（！）若干名の宗教学者の中にも相当な差異がある。ただ、制度化された自らの知自体を自己批判的に対象化する営みを往々にして欠いてきた心理学と比べれば、程度の差はあれ宗教学は常にそれをなしてきた（宗教をめぐる状況の変化が、それをなさねばならない方向へ宗教学を追いやってきた）ということと言えるだろう。まして、「宗教」や「宗教のような現象」を直接に研究対象とする実証的宗教学ではなく、人間の宗教性、人間の生や実存における宗教的

な次元への思索を事とする宗教哲学の伝統から巣立った私には、私たちが現代の「宗教」的状况の中に巻き込まれているあり様と其中で展開される「宗教学」的な知のあり方を切り離すことはできず、前者の批判的对象化はかならず後者のそれと一体になったものとしてとらえられてきた。

たとえば、今回の研究発表会のために西脇、杉山両氏の著書を読み返してみても改めて感じた違和感は、その先行研究をレビューする際の「過度な」手際のよさであった。西脇氏の著書では、「宗教的自然観」をめぐる（とされる）先行研究がみな同一線上に並べられて紹介され、それらの研究の背景や、そこで「宗教」「自然観」「日本的」などの概念や言葉が持ち出されてくる場合のコンテクストの違いやズレを批判的に問題化できていない点不満であったし、このことは「宗教的自然観」というものが素朴に「ある」ものだと前提されており、それを心理学的に対象化し解明できるとする態度と一体のものであるように感じられた。また、杉山氏の著書においてもこれまでの宗教心理学の歴史が通覧される際、宗教心理学の過去の業績とされるものはあくまで一定の「宗教心理学」概念（それ自体が特定のコンテクストをもった相対的なもの）から切り取られ、その中での「意義」が云々されているにすぎない。こうした姿勢は、宗教学サイドから広い意味での「宗教心理の知」の新しい可能性を探ろうとして、これまでのさまざまな思想を「宗教心理思想として」読もうとするような試み（私を含めて本研究会における宗教学サイドの人たちのほぼ全員が執筆している『宗教心理の探究』など）とは初めから方向を異にしていると感じられる。たとえば一つの例として、私が長年研究してきたフロイトの思想に対する評価を挙げてみよう。おそらく心理学的宗教心理学の側からフロイトを見るとすれば、「宗教は一種の集団神経症である」と断じた彼の理論は、宗教を病的なものとしてのみとらえた一面的な理論ということになるであろうし、「エディプス・コンプレックスの普遍性や原父殺しの歴史

的事実性」にこだわった彼の宗教解釈は全く実証不可能なたわごとには過ぎないであろう。ただ、フロイトに対するこうした評価は、宗教学的宗教心理学というよりはむしろ「宗教的心理学」と呼べるような立場（ユング心理学やトランスパーソナル心理学など、加藤氏によるならば「心理学」ではなくて「哲学・思想」に属するもの）においてもかなりの程度共有されているものではないだろうか。しかし、（堀江氏や私のように）フロイトを一種の「宗教思想家」として見るような研究においては事情が異なる。そもそも「宗教は集団神経症だ」というのは一種のメタファーである。メタファーの本質は、単にあるものを別のものに喩えるだけではなく、双方向的な意味の移動を伴った新しい意味の創造がそこに生じることにある。したがって、宗教を集団神経症に喩えるフロイトの言説は、単に宗教を神経症という病的なものに還元するといったものではなく、「神経症」というものをフロイトがどのようにとらえていたのか（それと

どう関わろうとしたのか）、「集団」と「個人」とのかかわりをフロイトがどのように考えていたのか、といった問いへと私たちを向かわせることによって、フロイトが「宗教」を問題にするコンテキストそのものを彼の思想全体との連関の中で探るといった課題を私たちに突きつけざるを得ないのである。

そうして見れば、「宗教心理学」という「あるようでいてなく、ないようでいてある（色即是空・空即是色）」何ものかについての私自身のとりあえずの態度としては、「宗教的心理学」と「心理学的（科学的）宗教心理学」の両方をにらみながら、それぞれの知の基盤を批判的に撃ちつつ、現代における「宗教」をめぐる知の閉塞状況自体を照らし出していく、ということに尽きるであろうか。もっともこんなことを言うと、昔から私を知っている人たちは「なんとまあ進歩のない奴か・・・」と笑うであろうが。

フロア出席者から

公開研究会に参加しての感想

石井賀洋子(名古屋大学大学院)

宗教心理学研究会の活動を知ったのは、ホームページ上でした。参加してみたいという気持ちを持っていましたが、機会がないまま時が過ぎていきました。この秋、公開研究会が南山大学で開催されることを知り、今がチャンスだと考え参加させていただく決心をしました。

私の現在の研究内容は、「現代医療における宗教のかかわり」に関するものです。私は、臨床で看護師として仕事をしておりました。若い頃(?)は仕事を覚えることに夢中でしたが、同時に患者さんを深く理解するための手立てを模索していたように思います。今日の医療現場においては、病気の診断・治療、延命治療の選択、治療や療養に伴う生命への

脅威、死を迎えようとする人へのケアなど、さまざまな状況が展開されています。こういった現代医療の問題に、改めて深く向き合う必要性を感じていました。

現代社会において、終末期医療は重大な関心事となっています。死は誰にでも訪れるものであり、避けて通れるものではないからです。臨床現場では、終末期の患者さんのケアに携わることが多くありました。「宗教」に助けを求め、現在自分が置かれている状況に意味を持たせようとする人の姿は印象的で、私自身が「宗教」について考えざるを得ない状況になっていきました。その結果、紆余曲折を経、人間理解の基本として「宗教」を学んでみてはどうかと思うようになり、今日の学

びにつながっています。漠然とした思いではありましたが、大学院で宗教を学ぶことになり、自分の思いを少しずつですが形にできる喜びを感じています。宗教団体が医療施設を持つケースは多くありますが、その実態は知られていません。現代医療と宗教が、どうかかわり共存しているのかといったことを知りたいという好奇心から、行動に移している状況です。

心理学についても、宗教学についても、その知識は中途半端なもので、研究会での議論を理解できるかという不安がありました。しかし、杉山幸子先生、西脇良先生のご発表は大変興味深く、私自身の研究を進める上で示唆に富んだものとなりました。

私自身のフィールドが宗教団体の運営する医療施設ということもあり、杉山先生の研究アプローチには関心を寄せています。見よう見まねで、参与観察、聞き取り調査といったフィールドワークを行ってきましたが、個人情報保護法の施行後、医療施設側の対応に変化が感じられるようになりました。以前よりプライバシーの保護という観点から守秘義務の遵守を当然のこととしてとらえ、研究に関しては細心の注意を払ってきましたが、調査

方法に対して再考する段階にあり、さまざまな視点から検討していく必要性を感じています。

西脇先生の発表からは、無宗教といわれる日本人の宗教に対する思いの一面を知ることができました。日本人の宗教的自然観を知ることが、宗教の問題を考える上で極めて重要な視点と考えています。自分自身の宗教観、自然観といったものが、どのようなものなのか、改めて考える機会となりました。

指定討論、フロア討論での活発な議論はとも刺激的なもので、先生方の議論の仲間入りをするには勉強不足ですが、自分の立ち位置を確認する機会となり、知識を深めていくチャンスを得たと思っています。この機会に宗教心理研究会の仲間入りをさせていただくことになりました。宗教学も心理学も、宗教心理についても知識は十分ではありません。しかし、医療を専門としながら、この領域に興味関心を持つものとして、常に問題を意識持ちつつ学びを続け、情報発信していく努力を続けていきたいと考えています。

継続は力を実感させていただきました。今後とも、よろしく願いいたします。

事務局からのお知らせ

宗教心理学研究会ニューズレター第5号が発行されました。今回の内容は、第3回研究発表会報告および公開研究発表会報告の2つの特集からなっております。このニューズレターを通して、これからの宗教心理学的研究を考える機会となればと思っております。

ニューズレターに取り上げて欲しい企画がありましたら、ぜひ事務局までご提案いただければ幸いです。これからも研究会に対する会員の皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしております。

(K.M)

[宗教心理学研究会の今後の予定]

2006年3月

第4回研究発表会企画決定

2006年4月

第4回研究発表会企画申込み：日本心理学会第70回大会準備委員会

2006年7月

宗教心理学研究会ニューズレター第6号の原稿依頼

2005年8月

宗教心理学研究会ニューズレター第6号の構成・編集作業

2006年9月

宗教心理学研究会ニューズレター第6号発行予定

2006年11月3日(金)～5日(日)

日本心理学会第70回大会ワークショップ(第4回研究発表会)開催予定 [開催校:九州大学]

発行: 宗教心理学研究会

編集: 宗教心理学研究会事務局

研究会事務局

担当: 松島公望 [kobo@yf6.so-net.ne.jp]

研究会ホームページおよびメーリングリスト管理・運営

担当: 西脇 良 [rnishiwk@nanzan-u.ac.jp]

研究会ホームページ

http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/